

■■ 春の公開講演会

〈育てられる者〉から〈育てる者〉への世代間伝達を考える

2009年6月24日(水)

18:00~20:00

南山大学 名古屋キャンパス D棟

鯨岡 峻 氏

(中京大学心理学部教授・京都大学名誉教授)

【津村】：こんばんは。今日は南山大学人間関係研究センター主催の講演会にお越しくださいまして、ありがとうございます。私はセンター長をしております津村と申します。

今日は鯨岡先生をお迎えして、「〈育てられる者〉から〈育てる者〉への世代間伝達を考える」というテーマでお話を伺います。

非常にパーソナルな話ですが、私自身、去年の秋から息子夫婦と孫と一緒に生活が始まりまして、孫を溺愛しているおじいちゃんが、今後どのように息子、嫁さん、孫、家内と一緒に生活をすればいいかということも含めまして、お話を聞かせていただけたらと思います。

個人的にもこれからの講演会を楽しみにしております。鯨岡先生、よろしくお願ひいたします。

【司会(川浦)】：初めまして。南山大学人間関係研究センター、センター員の川浦と申します。今日は鯨岡先生をお招きしての講演会がかないましたことを、本当にうれしく思っております。

先生は非常にしっかりとしたアカデミックなフレームワークをお持ちなので、すけれども、今日の講演会は非常に平たく、分かりやすくお話しされるということでございます。

鯨岡先生はこれまでに多くの本を著していらっしゃいます。もし先生のこれまでの研究、先生の理論的なバックグラウンドを知りたいという方には、『ひとがひとをわかるといふこと』(ミネルヴァ書房)をお勧めいたします。また近著としましては『エピソード記述で保育を描く』(ミネルヴァ書房)がございます。こちらのほうは保育にまつわるエピソードが多く記されておりますので、先生の研究がより身近に、分かりやすく皆さんに伝わるのではないかと思っています。

それでは、皆さんお待ちかねですので、早速お話に入っていきたいと思えます。鯨岡先生、よろしくお願ひいたします。

【鯨岡氏】：皆さん、こんばんは。私は3年前に京都大学を定年になりまして、現在は南山大学のライバル校と言われております中京大学に勤めております。

今日は「〈育てられる者〉から〈育てる者〉への世代間伝達を考える」というテーマでお話をさせていただくのですが、7時半ごろを目処に話を終わって、少し質問をお受けしたいと思えますので、そのつもりでお聞きください。

1. はじめに

私は発達心理学が専門なのですが、これまで、発達というどうしても「赤ちゃんから大人へ」という、赤ちゃんがどんなふうにして大人になっていくのだろうかという枠組みで考えられてきたところがあるのですけれども、そういう見方だとどうしても人の一生をとらえることができません。未熟な子どもが完成した大人へという枠組みでは、せいぜい20年かそこらぐらいしか跡付けられないのですね。能力の完成という点で言えば、それを取り扱うことはできるかもしれないけれども、人の一生を扱う枠組みとしては、子どもから大人へという枠組みではちょっと狭いのではないかということを考えてきました。

そこで少し視点を変えて、発達の問題を「生涯」をにらんで考えていこうとしたときに、「育てられる者から育てる者へ」という考え方が、私の中で自然に導かれてきたわけです。

そういう視点に立って考えてみると視野が開がり、いろいろな考え方ができるのではないかと思うようになりました。そして、だんだん保育のこととか、あるいは障碍のある子どもの養育のこと、あるいは青年期の問題、あるいは終末期の問題、等々、人生のすべてのレンジにわたって考えていけるのではないかと思うようになりました。そこで、きょうはこういうテーマを掲げてみたのですけれども、レジュメに沿いながらお話をさせていただきます。

ここには若い方もいらっしゃるけれども、既に子どもをお持ちの方、あるいは先ほどのセンター長のお話のように、おじいちゃんになったという方もいらっしゃると思えます。いずれにしても、初めて親になるときに、そこには大きな人生上の節目があります。育てられる者であった人が、今度は育てる者に立場を変える。立場としては180度変わるわけです。そして、初めて育てる者になったときに、自分がこれまで育てられて育ってきたことが改めて納得できるようになります。「子育てをして初めて親のありがたみ分かる」ということは古くから言われてきたことですが、若いときはそういうことはみんな言葉としては知っていても、まだ実感がないわけですね。でも、実際に自分がそこに立ってみますと、なるほど、そうだなあということが本当に実感できる。

そのときに、人として生きることが自分だけのことでなくて、世代から世

代へと順送りに送られていくことなんだなあということも、ほんやりと理解できるようになるのではないかと。今日はそのあたりの話をしたいと思います。

実は祖父母の立場になるときも、それと似たような経験が生まれます。つまり、自分がかつて育てられる者から育てる者になったときに、親という立場を経験したわけですが、その経験を今、自分の子どもが通過しようとしている。それを今度は祖父母の立場で見守らなければならない。これがなかなか難儀なのです。温かく見守って、できるだけ配慮をするのが祖父母の役目だといっても、つい気になって、ここをこうしてみたらと口を出したり手を出したりしてしまう。

しかし、手出しをしすぎれば、親になりたての子どものプライドを傷付けられないとも限らない。支援は必要ですから手伝いはいっぱいするのですが、やはり「主役はあなただよ」というように、子どもに手を渡していかなければいけない。そのときの祖父母の立場というのは、結構難しいものがあります。

自分が親になったときに、自分の親、つまり祖父母になった親たちが、自分の子どもにどういうことをしてくれたかということもまた思い起こされてきて、例えば私がおじいちゃんになったとき、私の親が私の子ども（孫）に対してどういう態度をとったか、どういうことをしたかということが全部思い起こされてくる。そのように、世代が順送りにいろいろな経験をしていくわけですね。ある意味では当たり前のことなのですが、その当たり前のことを「発達」という枠組みの中で考えてみようと思ったのです。

そうしてみると、人生で「親になる」ということが2度起こる。それは、自分が親になるときと自分の子どもが親になるときですが、どの家族もそうだと思うのですが、それをどのようにくぐり抜けるのかということが、一つの家族の中で一つのドラマになる。平凡な家庭であっても、子の親になり、また、子の祖父母になるということは、一筋縄でいかないものがある、そこには何らかのドラマがはらまれている。そこに人生の喜びもあれば、悲しみや辛さもあるのかなあと思うわけです。

2. 子どもは育てられて育つ・親は育てて育てられる

「子どもは育てられて育つ」と言えば非常に当たり前のことのように思いますが、本当に、いまの日本の親御さんたちに、子どもは育てられて育つのだということが理解されているかどうか。皆さんは、「子どもは発達するのだ」、「子どもは発達の物差しに沿って、階段を一段一段上っていくのだ」というような子育てイメージや、子どもの発達イメージを持っていると思いますが、自分がこう育てたから子どもはこうなったんだ、というような認識が本当にあるのかなあと思うわけです。

「育てられて育つ」というときに、育てられる子どもがいて、育てる親がいる。そして、育てる親になった人の親もいるかもしれない。「子ども・親・親の親」

というこの3世代と一緒に住むか住まないかにかかわらず、常に「育てる－育てられる」という関係で結ばれて、ずっとお互いに影響を及ぼし合っていく。このつながりのイメージはそこだけ見ますと、静止画を見るような、時間を止めて、そこに赤ちゃんがいる、親になった人がある、祖父母になった人があるという、ストップしたイメージですけれども、それを時間の中で動かしていくと、赤ちゃんだった人が1歳になる。そうすると、初めて親になった人は親として1歳になり、初めて祖父母になった人は、祖父母として1歳になるというように、時間を動かしていきますと、いろいろなことが見えてきます。

子どもは、今は子どもであるけれども、いずれは大人になるということが分かりますし、親についても、親になった人はみんなかつて自分を育ててくれた自分の親の子ども、自分の子どもが親になれば自分は祖父母の立場に移行することになるということが分かるはずで。このように見ていきますと、各世代の生涯発達過程が1世代の時間差を挟んで同時進行していくという事情が見えてまいります。

つまり、「子どもは育てられて育つ」という一見当たり前のことに、少し反省を加えて見ますと、子どもも、その親も、そのまた親も、それぞれが自分の生涯発達過程を進行中であること、そして「育てる－育てられる」という親子の間の世代間関係の中に、それぞれが巻き込まれていくのだということが見えてくると思います。

それがここに掲げた図の意味であります。「子ども・親・親の親」という3世代が、1世代スタートをずらしてそれぞれの人生をスタートしている。そして、その上と下は親と子の関係で、そこにおいて「育てる－育てられる」という関係が営まれ、子どもは成長し、親は親として成長する、あるいは祖父母は祖父母として成長するということが分かります。

3. 関係発達の概念図

これまでは、なぜか子どもだけが力をつけて、「3歳になったらこれができる」、「4歳になったらこれができる」というふうに発達を考えてきたのではないのでしょうか。子どもの能力面に着目すればそういう見方はとても分かりやすいのですけれども、それは発達の本当の姿をとらえているだろうか。能力面の結果をとらえてはいるかもしれないけれども、子どもの本当の発達の姿をとらえることになるのだろうかというのが私の基本的な疑問で、従来の考え方に逆らう形でこういう図を提示しています。

これを私はこれまでの著書の中で、「関係発達の概念図」という名前を付けて取り上げてきました。図1は最近少し修正を加えた図ですが、これまでの著書の中、例えばきょうの講演テーマと同じ内容について書かれている『〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ』（NHKブックス）では、図2のような概念図を提示してきました。

この図2と皆さんのお手元にある図1を比べてみると、2カ所変更点があります。この図2がオリジナル、最初の図です。そして、皆さんのお手元の図1には、この図の外側にもう一つ大きな楕円があります。改訂前の図2では「祖父母になる」というところでまっすぐ線が進んでいますが、この図を作ったとき私はまだおじいちゃんの経験がなくて、放っておいてもおじいちゃんになるんだなと思っていたわけです。しかし、やはり自分がおじいちゃんになってみると、親になるときほどの大きな転回ではないけれども、ここもくりと一回転させなければいけないくらい重みがあるんだなと思ったわけです。津村先生にもたぶんうなずいていただけのではないかと思いますけれども、単に「おじいちゃんになった」では済まない、自分の心の中に大きな変化が生まれます。そういう意味でここも一回転させるに至ったわけです。

これは、「子ども・親・親の親」という世代のつながりを、「子どもは育てら

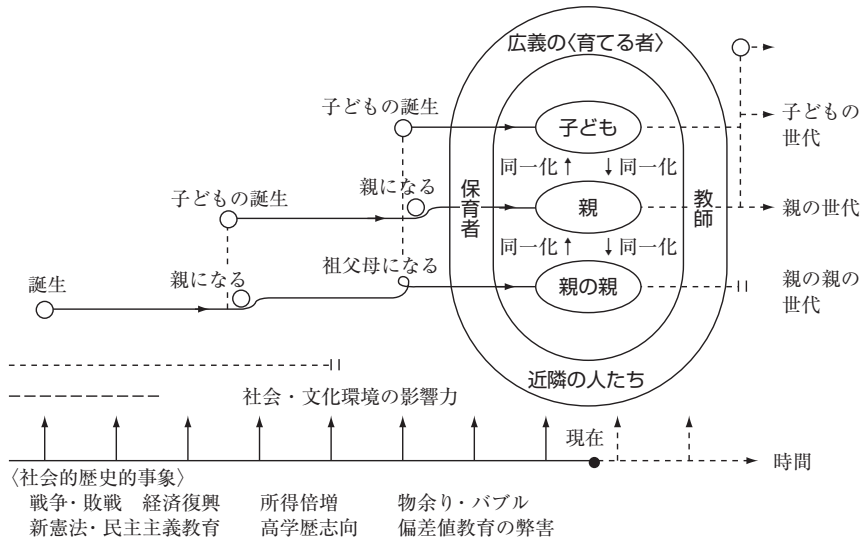


図1：生涯発達過程の観点から見た関係発達の概念図（改訂版）

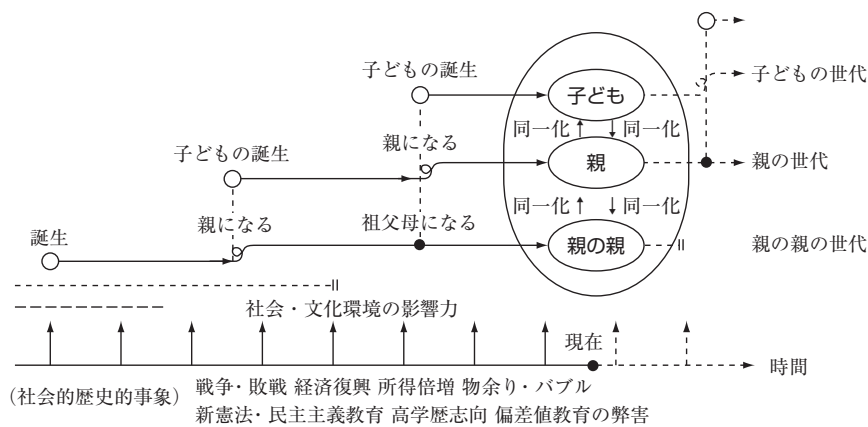


図2：生涯発達過程の観点から見た関係発達の概念図（改訂前）

れて育つ」ということを中心に考えるとき、どうも前の図では足りないところがある思ったものですから、この図2をちょっと修正したわけです。

この図1を中心にこれから説明をしたいと思います。

まず図から分かるように、「親の親・親・子ども」の各世代は1世代分ずつ遅れてその誕生があり、その後、相前後する世代は「育てる－育てられる」という関係で結び付きながらそれぞれの生涯発達過程を同時進行しているということが分かります。

この図において2点を変更することになったという裏には、先にも少し触れましたように、もう1年半前になりますけれども、私も初めての孫の誕生を経験しまして、それまでの親の世代からようやく親の親の世代に移行したということがあります。この移行が、やはり一人の人間の生涯発達過程の中でかなり大きな一つの転換点になった、と感じられたわけです。

私事を述べれば、私の子どもは二人とも娘だったので、妻に言わせても穏やかで育てやすかったのですが、私の娘が里帰りして産んだ最初の孫が男の子で、大変大きな声でわんわん泣く。自分の子どもが赤ちゃんのときは、こんな泣き声は経験したことないというような泣き声でわんわん泣く。夜中もしょっちゅう泣く。

私たちは2階で暮らしているのですが、朝、下へ降りていきますと、娘が幽霊のようにぼーっとして「昨日、全然寝てない」と、ほとんど泣きそうな顔なのです。そこで「私が抱っこしているから、1時間でもいいから寝なさい」と言って、私は必死になって抱っこをして、「からす」を何回も歌います。20回ぐらい歌っていると敵もあきらめて寝てくれて、そうするとこちらは大変うれしい。「からす」を歌って孫が寝てくれてこんなにうれしい気持ちになったなんて、最近の生活にあったかなあと思うわけですね。そして、娘をサポートしながらも、娘が母になっていくのを見守らなければいけない。そういうことがあって、やはりおじいちゃんになるのも結構大変で、妻ともども「大変だねえ」と言い合いました。

そのうち娘が、そんなに弱く育てたつもりはなかったのですが、歳を取ってから産んだということもあって、たちまち腱鞘炎と腰痛になりました。娘が赤ちゃんを抱けないので妻が代わりに抱くことになります。そうすると、生活が思うようにいなくなり、本当に大変でした。そして、母乳で育てていたため腱鞘炎の痛み止めの薬が飲めないなど、いろいろな事情があって、「あなたはたまたま私たちがいたからいいけれども、誰もサポートする人がいなかったら、どうやって子育てしていたのか」と言いたいぐらいでした。今、いろいろと子育て支援がありますけれども、産科の先生たちも「産まれて2か月は辛抱なさい」と若いお母さんたちに言うようですが、本当に最初は大変なのです。たまたま私の娘は実家へ戻って子育てをしていましたから何とか手助けができましたけれども、核家族で周りにだれも人がいなくて、それがかなわない人もい

るわけです。その場合、ボランティアでも行政の立場でもいいから何かサポートがいるということ、娘の様子を見ながら私は考えざるを得ませんでした。

そういうことも含めて、「祖父母になる」というところで、くると1回転させようということになったわけです。

もう一つの変更点は楕円が二重になっているところです。これまでは楕円の中心部しか描かれていませんでしたが、その外側にもう一つ楕円を描いて、そこに広い意味の育てる者を描き入れました。この事情については後に説明したいと思います。

1) 命の世代間連鎖

「関係発達概念図」は、前の世代から命を引き継いで誕生した子が、次の世代に命をバトンタッチするということの反復、つまり、命が世代から世代へと連鎖していく事実を示していると言ってもいいと思います。この図には3世代しか描かれていませんが、親の親にはそのまた親がいるというように、この図は左下にどんどん伸びていきます。

もしも子どもの世代が次の世代に命を引き継ぐならば、この図は右上に伸びていく可能性があります。このように、決して3世代に閉じられているわけではなく、過去からずっと続いてきて、未来にもずっと続いていくという図です。

振り返ってみれば、誰一人として自分一人の力でこの世に生まれてきた人はいません。両親に育てられたかどうかはともかく、両親から命を引き継がなければ、つまり親から命をもらわなければ、誰もこの世に生まれ出てくることはできなかったはず。この図に皆さん自身を当てはめてみれば、誰もがそのことに気がつくはず。

今の若い人たちは、「俺の人生をどう生きようと俺の勝手だろう」と言ったり、「シングルがかっこいいから私もシングルでいく」というように、ほとんど宗教的なシングル教への帰依を表明したりするのを耳にすることがしばしばありますけれども、そういう彼らもまた、この図にいや応無く位置づけられてしまうのです。

そんなことを言うと、「では、この世代間連鎖に乗らないとそれは人生ではないのか」という質問がすぐ出てきそうですけれども、そういうことを言っているのではなくて、ごく普通に生きればそうなるという話です。一人の人間の誕生は、「命の世代間伝達」という意味を否応無くまとう。そして、誕生した子どもを取り巻く先行世代の人たちの生涯発達過程を揺るがさずにおかない。私の孫の誕生は、祖父になった私の生活、私の人生を揺るがすわけです。単に赤ちゃんが生まれましたでは済まない。娘にとっても大事件であり、祖父母の立場になる人間にとっても大事件です。

従来の発達心理学は単に「赤ちゃんが生まれました」というところからスタートするわけですが、それはやはり現実を大きく抽象化した結果です。赤

ちゃんからスタートするのは自明のように見えますし、赤ちゃんがだんだん大きくなっていくのが発達だというのはとても分かりやすい考え方のように思いますが、実際に生活している場面で赤ちゃんだけ切り分けるとするのはかなりの抽象化の結果なのです。そのような抽象化を通して、子どもの発達、あるいは子どもを理解することが本当によかったのかどうか。私はそこはかなり大きな間違いがあったのではないかと思います。これまでの発達心理学が、赤ちゃんという「個」からスタートして、それが大きくなって力をつけていくというシナリオを作ったことにより大きな問題があったということ、私はこの図をにらみながら思うわけです。

同じことが一人の人間の死についても言えると思います。もう少しこの図の時間経過を長くすると、死も世代間で連鎖しているという事情が見えてくるはずですが。この図では、親の親はまだあの世には行っていませんが、もう少し経つと打ち止めになるという図であります。それは将来の私、あと何年か後の私の成り行きを意味しているわけです。私の親、この図で言えば親の親のそのまた親は、もうあの世に行っています。私もいずれこの世から消えるでしょう。そして、私の娘もいずれ何年か後にはこの世から消え、孫として生まれた子どもも80年ほど後にはこの世から消えていくでしょう。

ですから、命が世代間で連鎖していくということは、裏返せば死もまた世代間で連鎖していくことでもあります。一人の人間の誕生が個の誕生であると同時に、それを取り巻く人々を巻き込んで、その人たちに大きな影響を及ぼすように、一人の人間の死も確かに一人の個人に起こる出来事ですが、それを看取る周りの人たちに影響を及ぼさない死などというものは考えられないわけです。

最近の西欧の死生学や死に関する理論では、「個人が死ぬ」という枠組みで、それを当の個人がどう考え、死に逝く人がそれをどう引き受けるかという研究がたくさんありますけれども、やはり東洋的というか、私の枠組みで考えれば、死というのはその人だけに起こることではなくて、それを看取る人との関係の中に起こるのだというように考えてみなければなりません。

例えば、私の場合、妻の父親がかなり頑固一徹な人で「絶対葬式を出すな」と遺言したので、義母も妻の一番上の兄もそれに従って葬式をしませんでした。しかし、その後どれだけ家族が苦労したでしょうか。葬式をしなかったがゆえに、死んだと分かる縁故の人たちが次々と家にお焼香に来ます。その間、義母はずっとそれに付き合わなければなりません。ですから、葬式というのは、一回で済ませられるために、残された者が苦労しないで済む非常に意味のあることなのだということを、私も身をもって経験しました。

ですから、葬式というのは、自分のためだけならしてくれなくてもいいと思いますけれども、実はこれは残される人にとって必要なことなのだ私は強く思いました。つまり、死は確かに個人に起こることなのですが、看取る

人たちを巻き込んだ意味を持つので、ある意味で「関係論的な死」というものを考えなければいけないと、私は先の自分の経験から思うのです。この図にはしっかり描かれていませんが、そういうこともこの図から考えることができるのではないのでしょうか。

2) 個の生涯発達過程の基本構造

次に「個の生涯発達過程の基本構造」ということですが、「関係発達概念図」の親の世代に注目してみてください。親の世代を表す線を左にたどっていきますと、親もまた前の世代の親から命を引き継いで誕生した事実に行き着きます。これを基点にその線を右に進みますと、前の世代から命を引き継いで誕生した子どもが長い年月かかって成長し、大人になり、カップルをなして次の世代に命を引き継ぐ。そして、誕生した次の世代を育てながら、なお自らの生涯発達過程を進行中であることが読み取れます。

そして、次の世代が成長を遂げて成人する頃、自分を育ててくれた前の世代が老いてきて、その介護にかかわり、最終的にはその世代を看取るときがやってきます。いずれ、次の世代が次の次の世代に命を引き継げば、自分は祖父母の立場に移行して、今度は自分自身が次の世代に介護を受け、看取られてその生涯過程に終止符が打たれるときがやってくる、そういう事情が見えてくると思います。

これが一人の人間の生涯発達過程ではないかと思えます。言い換えれば、一人の人間の生涯発達過程は、誕生から30年前後の「育てられる者の時代」、その後の30年前後の「育てる者の時代」、そして、前の世代を「介護し看取る者の時代」を経て、「介護され看取られる者の時代」にたどり着いて人生の終末を迎えるという一般的な構図が描かれます。

人間はいつまでも生きていることはできませんから、いつかは死ななければいけない。人によって長い、短いはあるかもしれませんが、平均寿命的な考え方をすれば、およそ80年前後の人生の間に、育てられる者から育てる者へ、介護し看取る者から介護され看取られる者へ、こういう位相をいくつかくぐり抜けて、人は80年の一生を終える。私の親もそういう道をたどったし、私もそれを今たどりつつあって終末が近くなってきているし、自分の子どもでもある娘たちも今、そういう人生を歩んで30代半ばに到達し、孫が生まれて1歳半になりました。このように、みんな順送りでこのラインを動いていくのです。

そう考えますと、すべてを自己決定して、どこまでも自己実現を目指して、「私が、私が」と、一回しかない人生を目一杯生きなければというような振りかぶった考え方ではなくて、人は80年たてば土に還るのだし、親たちがたどった道とそんなに違った人生があるわけではないと、かなり達観できるのではないかと思うわけです。

3) 人生のコペルニクスの転回

次に「人生のコペルニクスの転回」ということについてですが、図1の親の世代や親の親の世代の線分が誕生から右に進んできて、親になるところでくると一回転して、少しずれた軌道を進む経緯を説明したいと思います。

親になるまでのところは「育てられる者の時代」、それ以後は「育てる者の時代」と呼んできたわけですが、この転回を挟んで「育てられる者」から「育てる者」への転換がなされています。これは単に人生上の一つの節目ということではなくて、私自身の過去を振り返ってみても、ここの転換点は非常に大きな意味を持っていました。もちろんパートナーと一緒に生活を始めたということも確かに大きいけれども、やはり育てられる者から育てる者へ変わったところというのは、ある意味で生活がすっかり変わる。あるいは、生き方、生きることへの構え方がガラリと変わるのですね。

独り身の間は、自分さえしっかりしていれば、自分さえ努力すれば、世の中をどうにでも動かしていけると考えています。私も若いときはそういう傲慢な考えを持っておりました。ですから、周りに対しても厳しく、「自分はこれだけ頑張っているのだから、あなたももっと頑張れ」という強い態度をとっていました。

しかし、小さい命が生まれたら、それを私たちは守って育てていかなければいけない。そのときに、これまでのように自分の思い通りという生き方はできない。もちろんパートナーと生活を始めたところで、もう自分の思い通りの生活ができなくなっているのですけれども、その重みが違ってきます。やはり子どもが何かを求めたときに、今、自分が何をやっているかということには関係なく、まずは子どもの求めに応じていかなければならない。そうなったときに生活がガラリと変わってくる。これを「くるりと一回転」させた図で表現したかったわけです。

私の妻は最初の子どもが誕生して、新米ママの生活が始まって間もないころに、「これは私の人生におけるコペルニクスの転回だわ」とつぶやきました。それは明らかに、私への当てこすりでありました。要するにその言葉からは、私が新米パパとして頼りない、何の役にも立たないという気持ちがありありと伝わってきました。

しかし、新米パパとなった私にも、妻に比べれば程度の差もあり、重みの違いもあったでしょうけれども、やはり人生が変わったなあという思いはあったので、それ以来、妻の言葉を借りてこの「くるりと一回転」を「コペルニクスの転回」と呼んでいます。皆さんの場合はどうだったでしょうか。

いま、親になった若い人たちが子育てで悩んで、なかなか育てる者になれない現状がありますが、この図に照らせばそれも分かります。これまでの育てられる者の時代は、自分の思い通りに時間を使えるし、自分の思い通りに世界を動かしていました。そういう生活が、今度は子どもによって自分の時間の使

い方を決められていく。それほど子どもの存在が大きくて、自分の生活がここまで揺さぶられてしまうのかと最初は本当にびっくりします。ですから、みんなそこであたふたする。特に、今の若い人たちは、自己決定、自己実現を目指してきた人であればあるほど、今の自分の価値を崩したくないと思います。そうすると、子育てがしんどくなってくるわけです。

ですから、このコペルニクス的転回は、今から50年前の女性たちの多くがすんなり子育てに入っていた時代はともかくとして、今の若い親になった人たちからすると、もっともっと厳しいものがあるのかもしれませんが。共働きでそれぞれに責任のあるポジションに就いて仕事をしようと思っている人たちにとって、まずは子どもの要求に応えるために自分の時間を作れない現実是非常に大きいものがあるわけです。ですから、子育て支援が必要になるのです。

「育てる者」になるには本当に時間がかかります。子どもの成長過程と親の成長過程は同時進行するもので、子どもが1歳になれば親も1歳になり、子どもが3歳になれば親として3歳になったというように、親も最初から完ぺきに親をやれる人はいないわけで、子どもを育てながら、だんだん親としてどうすべきかを身につけていくわけです。その親らしくなるまでのところは、どうしても周りのサポートが必要です。子育て支援というのは、決して子育てを肩代わりしてあげるのではなく、親が親らしくなっていくのをいかにサポートするかということだろうと思うのですけれども、そのことがこの図から分かるのではないかと思います。

コペルニクス的転回は難しい局面もはらんでいて、虐待に通じたり、夫婦の考え方が合わなくなって離婚に至ったりというように、せっかく子どもが誕生してきて幸せいっぱいのところ、実は夫婦関係が壊れていききっかけにもなりうるということも、「くるりと一回転」の中に含まれていると思っています。

子育ての悩みはだれにでも起こるもので、だれもが虐待の一步手前まで至ってしまう危険性を抱えています。特別な人が虐待するのではなく、すべての人が時と場合によれば虐待一步寸前というところまではいくのが子育てなのです。そういうところを「くるりと一回転」ということの中に含み込んで考えていただければと思います。そうすると、単に子どもが生まれて、1年、2年とすくすく成長して、20歳ごろに能力的に完成しましたという単純な発達モデルではなくて、「育てる－育てられる」という関係にはいっぱい落とし穴が待ち構えていて、その落とし穴にはまらないように、ほとんど綱渡りのようにして進んでいくのが子育てだということが見えてくるのではないかと思います。

ともあれ、この図1に示される形で生涯発達過程をとらえますと、子どもが成長を遂げるときに、親もまた親として成長を遂げること。親としての成長は子どもの成長と同時進行すること。子どもの成長によって親の成長が促される面があるという点で、親が子どもによって育てられる面があると言ってもいいだろうということが分かります。

4) 「育てる一育てられる」関係の世代間循環

次に「育てる一育てられる」関係の世代間循環についてですが、これは概念図1の内側の楕円の中をご覧くださいますと、「子ども・親・親の親」という三世代が楕円にくくられていて、その楕円には上下に伸びる矢印が描いてあって、「同一化」という文言が入っています。そこを簡単に説明したいと思います。

この楕円内を親の世代中心に見てみますと、親は子どもから同一化を向けられるとともに、子どもに同一化を向けているということを示しています。また親と親の親はもともと子どもと親の関係ですから、そこにも双方向の同一化の矢印が描き込まれています。そうすると、ちょうど親は子どもと親の親に挟まれて、同一化の矢印が四重になっているのが見てとれると思います。これはいったい何を意味するのでしょうか。

私は自分が親になって、子どもに同一化している自分に気がついたときに、このモデルのおおよその輪郭が見えた気がしました。実際にこの図を描いて、関係発達の考え方をきちんと定式化するのは私がずっと歳をとってからですが、子どもを育てながら子どもの中にかつての自分を見る経験、つまり自分が子どもに同一化するという経験が自分の中に起こったときに「関係発達の概念図」という構想はほぼできたのではないかと考えています。

初めて自分の子どもを抱いたとき、我が子が下から私を笑顔で見上げているのを見て、ふと「ああ、私にもこういう赤ちゃんのときがあったんだなあ」と思いました。皆さんは子どもを抱いたときに、そういう気持ちになったことはありませんか。もちろん赤ちゃんのときの記憶はありませんが、想像力の中で、自分もこのように親に抱っこされて、下から笑顔で親を見上げていたときがあったんだろうなあということを思う瞬間があるわけです。それは目の前の子どもが、かつて赤ちゃんだったときの自分だという見方です。

では、そのとき、抱っこしている人はだれかということ、自分の親だということになります。いま私が自分の子どもをこんな気持ちで抱っこしているように、自分の親も私が赤ちゃんだったとき、こんな気持ちで抱っこしていたときがあったんだろうなあという想像、それが冒頭に述べた「子育てをしてみて初めて親のありがたみが分かる」という文言になっていくわけです。

残念なことに、私は父親に対して、肯定的な同一化を向けられなかった人間でありました。父親は世間的には大変いい人だったらしいのですが、家庭では暴君でした。明治時代の人ですから仕方がないのですけれども、私の母親はほとんどお手伝いさん扱いを受けるような感じで、それが子ども心に非常に嫌でした。ですから、物心ついてからは、反面教師というのか、あんな父親にはなりたくないと思って大きくなってきました。

それも裏返しの同一化、反同一化なのであって、結局は同一化しているのですけれども、私が親になって子どもを抱っこして、「私の父もこんな気持ちで私を抱っこしていたときがあったのか」ということに気がついたとき、ちょっ

と愕然としました。そのあたりから少し父親に対する見方が変わってきたかもしれせん。物心ついてから成人した後まで、父とは口もききたくないというような気分でおりましたけれども、自分が親になって少し考え方が変わってくる中で、父親に対する考え方も変わってきたのではないかと思うところがあります。

要するに、我が子の様子にひき込まれて、「自分にもこういうときがあったんだ」と同一化を向けた瞬間、私の思いを私の親もかつてしていたに違いないと気づきます。そこから「育てられる一育てる」という関係が同一化を挟んで、世代間で順繰りに循環していく事情が見えてきます。こうした体験がこの関係発達の概念図を用意するものだったということです。

そうすると、この楕円内において3世代が同一化を向け合う関係こそ、一人の子どもが育てられて育つということの意味であり、一人の親が子どもを育てることで育てられるということの意味だということが見えてくると思います。

しかしながら、双方向の同一化の矢印を向け合う世代間の関係は、残念なことに必ずしも幸せを約束してくれるものではなく、同一化するからこそ腹立たしさや怒りが込み上げてくるときがあります。ですから、親を経験したことのある人は分かるでしょうけれども、よその子が少々悪いことをしても、そんなにいら立たずに見守っていることができますが、しかし、我が子がいけないことをしたときにはカッとなる。あれは何なのでしょう。

それはやはり、子どもに同一化しているからです。よその子には優しくできても、我が子に対してはどうしても優しくなれないというのは、やはりどこかで同一化を向けてしまっているからなのです。例えば、「小さいときの自分はこんなふうじゃなかった、もっとちゃんとしていた」と思うと、ますます腹が立ってくるでしょうし、あるいは、「小さいときの私はもっともっとちゃんと自己主張をしていた。どうしてあなたはもっとはっきり言わないの」とか、要するに、いつも小さいころの自分というものがベースにあって、我が子は自分と同じだというように同一化しているところがあるから、肯定できたり肯定できなかつたり腹が立ったりする。それが親子の関係というもので、親子だから常に幸せな関係、ということでは絶対にはないと思います。

親子だからこそ幸せな関係はいっぱいあります。しかし、親子だからこそ腹立たしい感情も必ず起こってきます。ですから、親子の関係というのは文字どおり喜怒哀楽が生まれる関係なのです。親子関係を綺麗ごとづくめに考えて、親子はみんないい関係なのだ、例外的に私の家族だけ親子関係がよくないのだ、と考えることはないのです。どこの親子だって、必ずそこには葛藤がある。そこを考えていくのが内側の楕円の意味です。

子どもは思春期になると、親の話には耳を貸さずに「むかつく」と言って、親をシャットアウトしてしまう。それに対して親がきつく言う子どもはさらに反発します。青年期の子どもを育てているとき、親は苦勞をします。家族の

中にきしむ瞬間が起こってくるわけですが、それをよくないこと、起こってはいけないことのように考えるのではなく、その負の出来事はどの家庭にも起こることで、どうすれば少なく済ませられるか、を考えるべきでしょう。「理想的な家庭ではそういうことは起こらない」と考えるのではなく、「必ず起こることで、それが必要以上に厳しくならないようにするにはどうしたらいいか」という発想をしていくことは、私の人間観にもかかわっています。

「人間はいかなる存在か」という哲学めいた話が私の考え方のバックにはあるのですが、そういうある種の人間観といますか、いいことづくめの人間というのは考えられないので、人間には必ず良い面と悪い面の両面があります。そういう人間同士がかかわりを持って生活をすれば、親子の関係であれ、恋人同士の関係であれ、夫婦の関係であれ、必ず葛藤はつきものだとするところから私は理屈を組み立てています。ですから、葛藤のない幸せな関係をモデルに、「どうして葛藤が起こるのだろう」という問いを立てるのではなく、基本的に葛藤は起こるとするところからスタートして、その起こる葛藤をどうすればある程度のところでとどめ置くことができるのか、というように発想するのがいいのではないかと考えています。そういうことがこの楕円内で行ったことでした。

以上がこの概念図の説明ですが、実は、この概念図は図の持つ一般的な制約として、現実をうまくすくい取っていないところがあります。各世代の生涯発達過程が「育てる一育てられる」という関係で結ばれながら、同時進行する様に焦点を合わせたに過ぎません。それによって確かに命の世代間連鎖や死の世代間連鎖が見えてきましたし、育てられる者から育てる者へのコベルニクスの転回も見えてきましたし、介護し看取る者から介護され看取られる者への移行も見えてきたのですけれども、もう一度「子どもは育てられて育つ」という点に目を向け直してみますと、「育てる」という営みは楕円の内側だけで考えていくことができるだろうかという疑問が残ります。

ちょうどここ1～2年ですけれども、私は京都大学を定年になってから、慶應義塾大学出版会の『教育と医学』という雑誌に「子どもは育てられて育つ」という題名の論文の連載をしています。2008年から継続中なのですが、ようやく1年ちょっと経過して15回までできました。

その中で「子どもは育てられて育つ」というテーマを様々な角度から考えているのですが、その中でこの図1を描いて、これまで内側の楕円だけで議論してきたことを半ば自己批判しながら、少し視点を変えていこうとしている最中です。その辺りのことを詳しくお知りになりたい方は、『教育と医学』を読んでいただければ、今日の話の足りないところを分かって頂けるかもしれません。

4. 広義の<育てる者>たちの影響という視点

概念図の変更点の二つ目は、3世代を取り囲む楕円の外側をもう一つの楕円、広義の育てる者たち、つまりきょうだいや保育者、教師や近隣の人、親類縁者たちが取り囲んでいるところです。従来の図は、「育てる一育てられる」という世代間の関係を強調するには都合のよいものでしたが、今述べましたように「育てられて育つ」というところに密着してみると、もう少し視点を広げておく必要が出てまいります。

まず私の自己批判の中身ですが、「(1) 親子の関係は基本的に三者の関係である」というところから始めましょう。

1) 親子の関係は基本的に三者の関係である

私はこれまで、「育てる者」という言い方、あるいは「親」という表現をしてまいりました。そして、それは、この図では1本の線分で表現されています。

しかし、基本的に子どもから見れば親はいつも2人いるわけです。親の親は、子どもから見れば4人の祖父母なのです。それが、1本の線分に圧縮されて表現されている。抽象化していけばそうせざるを得ないのですけれども、そうすることによって現実がかなり見えにくくなってしまう面もある。そのことを考えてみなければなりません。

ですから、親子の関係は二者関係が中心ではなくて、基本的には子どもと母親と父親という三者の関係を中心に考えられなければならない。たとえ離婚や死別によって単身家庭になったとしても、子どもから見れば親と子の関係は常に不在の親をも含んだ両親との関係なのです。このことは育てられて育つ過程に、両親の関係の有り様が深く影を落とすことを意味します。

例えば「コペルニクス的転回」ひとつ取り上げてみても、あの図では「育てられる者から育てる者へ」のところでもぐるりと一回転しているだけでした。しかし、夫婦について、誕生の年月がずれた分だけ人生のスタートが違う2本の線分が同時進行したと考えますと、夫にもコペルニクス的転回が起こり、妻にもコペルニクス的転回が起こることになります。

「だれにもコペルニクス的転回が起こるのだ」と言ってしまうえば簡単ですが、現実にはどうかといいますと、我が家に関して言えば、妻のコペルニクス的転回が先行して私が一歩遅れるということがありました。私事でお恥ずかしいのですが、私はパートナーとして同じ大学の同じ研究室の同窓の相手を選びました。そして、私たちは戦後の民主主義教育の中で、男女平等教育を受けて育ってきました。男女平等で対等にやっというこで、妻も私も研究を志向していましたが、私だけ地方の大学に就職をして、妻は私について来てしまったために就職ができませんでした。それで、長い間専業主婦をするわけですが、その中で、妻はおなかに子どもを宿して以来、どんどん母に向かって変わりつつありました。しかし、私には父親になる実感が全然ないのです。最

近ですとお父さんも疑似妊娠体験で砂袋をお腹に巻かれたり、保健所では未来の父親学級を組織して赤ちゃんを入浴させる練習をしたりしていますが、私のころはそんなものはありませんでした。

そして、赤ちゃんが産まると、たちまち妻はコペルニクスの転回を遂げていくわけです。妻は上に女きょうだいがたくさんいて、モデルがいっぱいありましたので、母親や姉たちがモデルになって、子育てというのはこうすればいいというのがある程度分かっていたのでしょう。今と違って、自分の甥や姪にあたる子どもを赤ちゃんのときに抱っこしたりおむつを替えたりした経験もあったようです。

ですから、妻はどんどん母に向かって変身していきますが、私は、ほとんど赤ちゃんを育てる人ではありませんでした。自分の父親もモデルにはなりません。私は結局、妻が母になっていくのを横目で見ながら、妻をモデルに「父親としてはこういうことをすればいいんだ」ということを考えていったと思います。ですから、当然コペルニクスの転回は一步遅れる。しかし、それが妻にとっては不満なのです。これまで同じ大学で一緒に勉強してきたのに、何で私だけが、と当然なるわけです。この一步の遅れをなかなか許せない。こちらとしては焦るけれども、なかなか追い付けない。

ですから、コペルニクスの転回というのも、本当は母親と父親の2本の線分があって、そこに時間差が起こるのだということを考えると、実はせっかく子どもが生まれて幸せ一杯のはずなのに、それがまたけんかの原因を作っている。お互いにそれを認め合えて、それぞれがだんだん母親らしく、また、父親らしくなっていくのをゆっくり見守っていければそれはそれでいいのでしょうかけれども、妻は「早くお父さんらしくなってよ」と当然思う。私も焦るのですけれども、なかなかそうはなれない。それが家族の中では結構大変なわけです。

ですから、コペルニクスの転回といってくるりと一回転させているこの図には、少し時間がずれた二人の、つまり夫と妻の、コペルニクスの転回があり、その時間のずれがその夫婦に波紋を広げることが本当は含み込まれている。おそらくそれは、どこの家庭でも起こり、それが子育ての難しさと同時進行していくわけです。そのように考えると、いま子育て中の人たちのいろいろな悩みにより接近していけるのではないのでしょうか。

2) きょうだい関係を考える

それから、きょうだい関係です。これは後でエピソードを読んでも、「子どもの誕生」というところで横線が1本伸びていくのですけれども、少し時間がずれたところでそのきょうだいの誕生もある。下の子が生まれると、上の子がお兄ちゃんやお姉ちゃんになり、下の子との間に必ずきょうだい関係が生まれる。それは仲のいい関係であると同時に、ライバルの関係でもある。そして、きょうだいの間には必ず何かの波紋が起こります。

特に、3歳ぐらいのときに下に子どもが生まれると、必ず焼きもちをやきます。焼きもちをやく一方で、「自分はお兄ちゃんなんだ、お姉ちゃんなんだ」というようにプライドも感じている。ですから、3歳ぐらいの子どもの中では、すごく葛藤するものがあるわけです。お兄ちゃんらしく、お姉ちゃんらしくという気持ちと、だけどやはりお母さんを取られて腹が立つという気持ち、その中で子どもはだんだん上の子らしい心を育てていくことになるわけです。そして、下の子はとにかく上のお兄ちゃんやお姉ちゃんのやっていることを見習って、かすめ取って、何とかお兄ちゃんやお姉ちゃんの上に出たいという気持ちが当然起こります。それがきょうだい関係というものでしょう。その中で子どもは成長していくわけですが、その点もこの図では省略されています。

3) 広義の育てる者の存在

そして次に、この概念図の最も大きな自己批判の理由になりますけれども、「広義の育てる者の存在」が旧版では描かれていないということがあります。

いまは共働きのために0歳から子どもを保育園に預ける人がたくさんいます。そういう子どもは親によって育てられるだけでなく、保育者によっても育てられます。ですから「育てる者」というふうに括ったときに、「育てる者」は血の繋がった親ばかりではないのです。

その子を育てる側に回った大人達というのはたくさんいて、その人達の影響のなかで子どもは成長しているのです。

これは、ある意味で当然でありまして、いまのような核家族中心の時代になる前、大家族で生活しているときは、親だけで子どもを育てることはなかったわけですね。みんなが親になった人をサポートしながら子育てというのは営まれていました。

ですから、そういう大家族がサポートしていたものを、いまの時代は保育の人達がサポートする側に回っているというふうに考えてもいいのかもしれませんが。そういう意味で、「子どもを育てる」ということを考えるときに、保育を抜きにその子どもの育ちの問題は考えられない。

こんなことを述べてまいりましたが、この図には他に「文化の問題」などもあって、図の一番下には、「日本の歴史の変化」というものが示してあります。ちょうど私の世代を中心に書いていますから、第二次世界大戦の敗戦のところから書いてあります。

私は昭和18年の12月生まれですから、日本がほとんど戦争に負けることが分かった頃に生まれた子どもで、戦後の物の無い時代に幼少期を過ごし、日本が右肩上がりに高度経済成長を遂げていったところに青年期を過ごして、そして大学生になったという世代です。ですから、今の若い人達とはずいぶん時代差があります。影響を受けた文化が違いますから、世代間で文化が循環するといっても、判で押ししたようにきちんと同じ形で循環するわけではないのです。

しかし、その時代に翻弄されながらも、「育てられる者から育てる者」へ、「看取る者から看取られる者へ」という、その構図は変わらないのではないかと思うわけです。

5. 二人の保育者の描いたエピソードから

今まで色々な角度から、これまでの図を少し修正する必要があるということを書いてきたのですけれども、特に兄弟関係、あるいは家族関係の変化というものが子どもにどんな影響を及ぼすのか、それを2人の保育者の描いたエピソードを紹介するなかで、少し考えてみたいと思います。

ここで、子どもの生きている現実の姿をどうやって捉えていくか、これは方法論上非常に重要な問題ですね。たくさんの子どものデータを数量化してまとめて平均を出して、一般的な言説を導いていくという従来の研究には、私はまったく興味を惹かれません。というのも、そういう研究からは子どもの生きた具体的な姿が見えてこないからです。

私は、子どもの生きた姿をできるだけそのままの形で捉えて、そこから子どもが成長するということ、人が人生を送るということの意味を考えていきたいと思って、「エピソード記述」という方法論をみ出しました。先ほど川浦先生の方からご紹介のあった本はそれを取り上げたものです。そういう方法論を背景にしているのですが、その詳細は割愛して、まずエピソードを皆さんにご紹介してみたいと思います。

エピソード1：弟をたたくMちゃん

S保育士

<背景>

Mちゃんは2歳の女兒である。1ヶ月前に弟が生まれた。Mちゃんは「赤ちゃんが生まれたよ」と何度もうれしそうに話したり、それまでは小さいクラスの子どもに関心を示さなかったのに、自分から声をかけ、手を繋いで歩いてあげたりする姿も見られるようになり、弟が生まれたことをうれしく思っているんだと感じられた。

その一方で、時々不意に心細そうな表情を見せたり、急に甘えて来たりすることもあり、やはり不安もあるのだろうと思われた。弟が生まれてちょうど1ヶ月経ち、母が初めて弟を連れてMちゃんを送ってきた朝の出来事である。

<エピソード>

朝の登園時間、私が保育室で受け入れをしていると、Mちゃんが一人で部屋に入ってきた。「Mちゃん、おはよう」と声をかけMちゃんの後ろを見ると、お母さんが赤ちゃんを抱っこして入ってきた。「わあ、お母さん久しぶり、おめでとう。赤ちゃん見せて」と言って駆け寄ると、他の保育士も周りの子ども達も皆が一斉に集まってきた。お母さんが皆によく見えるように赤ちゃんを抱いたまましゃがんでくれたので「わあ、かわいい」と皆はお母さんと赤ちゃん

を取り囲んだ。

しばらくの間、皆が赤ちゃんに注目し、赤ちゃんの話題で盛り上がっていた。Mちゃんは返却するために持ってきた絵本を手を持って、赤ちゃんの足下の位置に立っていたが、その絵本で赤ちゃんの足の辺りをおくるみの上からポンポンと叩き始めた。それは痛くしようとしているわけでもないが好意的でもない、微妙な感じの叩きかただった。お母さんは怒るわけではなく、優しい口調で「痛い痛いよ、やめてね」とさらっと言ったがMちゃんは止める様子がなかった。強い叩き方でもなく、一見Mちゃんが意識的にしているようにも見えなかった。ので、それ以上は誰も何も言わず、また赤ちゃんの話題に戻っていった。

ふとMちゃんの顔を見ると半分怒ったような、半分寂しそうな何とも言えない表情をしている。「かわいい、かわいい」と赤ちゃんのことばかり言っていた私はMちゃんの表情にハッとした。そしてMちゃんを抱き寄せて「赤ちゃんかわいいね。Mちゃんみたいにかわいいね」と言った。Mちゃんはにっこり笑って頷くと「これ読んで」と持っていた絵本を差し出した。私は赤ちゃんを囲む輪から離れMちゃんに絵本を読んであげた。

<考察>

下の子どもが産まれると、誰もが大人より小なり複雑な気持ちを持つものである。新しい家族を迎えるために誰もが通る道であり、乗り越えていかなければならないものである。とはいえ、そのときその子が、自分が忘れられたような寂しく不安な思いをしていることも事実である。Mちゃんも弟はかわいい。でも憎らしいという複雑な思いを抱えているのだらうと思う。産まれたばかりの弟を大事な家族の一人として受け入れていくには、自分も大事だと思われている自信が必要である。Mちゃんが弟を受け入れていくために周りの大人が応接できることは「Mちゃんのことは忘れていないよ。今までと変わらず大事なMちゃんだよ」というメッセージを送ってあげることだと思う。

これは、皆の気持ちが赤ちゃんに向かったことにMちゃんが焼きもちをやいて、それに気づいた保育者が「赤ちゃんかわいいね。Mちゃんみたいにかわいいね」と、とっさに言葉を繋いだことによって、ようやくMちゃんの気持ちが和んだというエピソードです。

新しい家族を迎えるということは、子どもにとって、こういう葛藤をくぐり抜けることでもあるわけです。こうしたエピソードのなかに、「育てられる」と「育つ」という当たり前のことが具体的に表れています。ちょうど私が「きょうだい」の項で述べたのは、こういうエピソードが念頭にあったからです。

家族が円満に暮らしている場合でも、家族関係に変化が生まれれば必ず葛藤が生まれるということ、そしてそのように落ち着かなくなった子どもの心を、周囲の大人が受け止め支えることが育てることの大事な中身だということが、このエピソードから分かります。

それにしても、私はこのエピソードは本当にすごいなと思います。皆さんはどう読まれたでしょうか。これは色々なエピソード記述の勉強会をやる中で出会ったエピソードで、この保育士さんの実際の保育の様子を私は見たことがあります。とても穏やかなよい保育士さんです。

まず私が舌を巻いたのは、この「赤ちゃんかわいいね。Mちゃんみたいにかわいいね」という言葉です。これはなかなか言えない言葉です。私もMちゃんが独りぼっちになって焼きもちをやいている状態に気がついたら、きっと何か言葉をかけたと思いますけれども、私だったら「ごめん、ごめん。Mちゃんもかわいいよ」という言葉になっていただろうと思います。しかしこの保育士さんは、Mちゃんが赤ちゃんに焼きもちをやいているのが分かっているのに、「赤ちゃんかわいいね」を冒頭に持ってきました。そして「Mちゃんみたいにかわいいね」の最後の一言で、Mちゃんはグッと気持ちがほぐれて気持ちを立て直すことができたのです。

なぜ、この人は「赤ちゃんかわいいね」と冒頭に持っていったのでしょうか。

ここに保育士さんの心の動かし方があります。つまり保育士さんの願いのなかには、「あなたもかわいいんだよ」ということだけではなくて、やっぱり「赤ちゃんをかわいいと思うMちゃんであってほしい」という気持ちがあって、それが最初の「赤ちゃんかわいいね」になるわけです。そこが大事なのです。ですから赤ちゃんのことで盛り上がっていて「あなたのこと忘れていてごめんね。あなたもかわいいよ」というような対応だったら、たぶん誰でもできると思うのです。それを「赤ちゃんかわいいね」という一言のなかに、赤ちゃんに焼きもちをやくのじゃなくて、「赤ちゃんもかわいいよ。赤ちゃんもかわいがって、お姉ちゃんしてね」という気持ちが表れている。

普通はなかなかかけられない言葉が自然に紡ぎ出されています。この人はすごい保育士だなと感心しました。やはり現場の人はこういうことに心を砕いているのでできるのですが、我々学者はその点では絶対負けていて、いくら理屈をこねることはできても、こういう言葉かけはできないなと思います。

この人は40歳前の保育士さんなのですが、3人のお子さんをお持ちです。ですから、上の子が下の子に焼きもちをやいたり、焼きもちをやかれた下の子が、今度は上になってまた焼きもちをやくというようなシーンを自分の子どもたちについてきつと見てきているから、たぶんこういう態度をとれたのかなと思います。

保育というのは単に理屈で決まり切ったような対応をしていくのではなく、奥の深い、自分の実人生のなかでの様々な経験が織り込まれて、初めて懐の深い保育ができるのだなということを考えさせられたエピソードでした。

次は「エピソード2：新しい家族の誕生」を紹介します。

エピソード2：新しい家族の誕生

<背景>

Nちゃんは5歳の女児である。日頃からお喋りが好きで友達とも元気に遊んでいる。母1人、子1人の母子家庭できょうだいがいないせいかな年長さんになってからよく園で赤ちゃんを抱っこしてくれたり、かわいがったりしてくれている。その反面かわいがりかたに一方的なところも見られ、また時折ふと寂しそうな表情を見せたり、暗い表情になったりしていることがあって、私はNちゃんのそんな様子がずっと気になっていた。

<エピソード>

午前中の屋外での遊びのときである。私が花壇の雑草取りをしているところにNちゃんがやってきて「先生うれしいことがあったんだよ。お母さんにも他の先生にも内緒だよ」という。そこで私が「どうしたの?」とわくわくした気持ちで尋ねると、「お母さんのお腹に赤ちゃんがいるんだよ!」と満面の笑顔と弾んだ声で答える。私はNちゃんの所が母子家庭であることが分かっていたので、Nちゃんの言葉に一瞬ドキッとしたがNちゃんの笑顔に思わず「よかったね!おめでとう!Nちゃんはお姉ちゃんになるんだね!」と言ってしまった。私が言い終わる間もなくNちゃんは「お父さんはユウジって言うんだよ。ユウちゃんと言ってもいいんだって。先生もユウちゃんって呼んでもいいよ」と興奮気味に言う。これまで2人暮らしだったNちゃんに新しい家族が誕生したことで会話が盛り上がった。今まで見せていた暗い表情とは打って変わって、これからの生活に希望を抱き、心躍る様子が手に取るように伝わってきた。私はお父さんのことには触れずに「赤ちゃん楽しみだね。元気な赤ちゃんが生まれますようにって神様に祈っておくね。素敵なうれしい内緒話、ありがとう」と伝えて2人で一緒に保育室に戻った。

後で他の先生方に今のNちゃんの話の伝えると、Nちゃんは他の先生達にも既に話していたようで、そんなことからNちゃんの計り知れない喜びが伝わってくるようだった。

<考察>

Nちゃんの喜びに接することで、これまでNちゃんが母子家庭という環境で味わってきた寂しい気持ち、両親が揃った家庭を夢見る気持ちがかえって分かるような気がし、胸の痛む思いに駆られた。「内緒だよ」というNちゃんの心躍る思いに、ただただ共感していた私だったが、少し冷静になってみると、これから母親の出産・結婚・子育て、4人での暮らしとNちゃんの生活が大きく変わり、この先いろいろと大変なこともあるだろうと思わずにはいられなかった。それでも今の喜びを一緒になって喜んでくれる人をNちゃんが求めているのだと思い直し、このNちゃんの喜びの瞬間を理屈抜きで一緒に喜ぼうと思った。

先ほど私が示してきました関係発達概念図は、血の繋がった親子間の世代間循環というような枠組みで考えられてきたわけですが、それはある意味で私自身のこれまでの生涯発達過程を説明しようとして作ったモデルでもありました。

しかし現実には色々な家族がいて、このNちゃんのように親の離婚と再婚を経験して、新しいお父さんがきて、そのなかで育っていく子ども達も当然いる。それも本当は「育てられて育つ」という枠組みのなかで考えていかなければいけないことです。

ですから、これまでの古いバージョンで考えますと、どうしても血の繋がった親子関係が前提にあるかのような議論になってしまっていて、今の親子関係が多様になっている現実をなかなか掬い取れません。ですから、先ほどの外側の楕円をもう一つ書き加えて、親子の関係というのはもっと多様な関係がありうるということを視野に入れていかないと、今の例のような複雑な立場にある親子関係を例外のように扱ってしまうことになりかねません。

しかし、そうした家族を「例外扱い」することは、やはり今の日本の文化の現実には合わないのです。いま私は色々な保育園に出入りしておりますけれども、このNちゃんのように、お父さんが替わったり、お母さんが替わったりというような家族関係たくさん目にしますし、そのなかで子ども達はそれぞれに成長していているわけです。そういう子どもにとっては複雑な思いもあるに違いない、そういうことを抜きに親子関係や母子関係を考えることが、いかに現実離れしているかを念頭において、色々なバリエーションも視野に入れながら、それをも説明していける図式をやはり手にしておかなければいけないと思っております。

このエピソードを書いた人は園庭で草むしりしているぐらいですから、通常のクラスを持っている保育士さんではなく、園長先生か主任さんだと思うのですが、その先生にNちゃんは「お母さんのお腹のなかに赤ちゃんがいる」と言います。けれども、このNちゃんは母子家庭ですから、先生とすれば「えっ」という気持ちになったわけでしょう。

その先生の「えっ」という気持ちが伝わったのか、「お父さんはユウジって言うんだ。ユウちゃんって呼んでもいいんだよ」とNちゃんは興奮して伝えます。その子どもの喜ぶ気持ちもよく分かるけれども、長い目で見たときに、こういう義理の父親と娘の関係が大きくなったときに一番ややこしくなりやすい関係だというのが、この保育士さんにしてみれば経験上わかっている。ですから、将来どうなるのだろうかと考えたとき、Nちゃんが喜んでいるようには素直に喜べないところがある。

しかも新しいお父さんが来て、お母さんとの間に子どもが生まれなくてずっと自分のことをかわいがってくれるという関係ならともかく、新しいお父さんの子どもがすぐ生まれてくるという状況で、現実には子どもが生まれてきた後に

Nちゃんがどういう扱いになるのか。そういうことを考えたときに私達は色々なことを考えてしまいます。

複雑な家庭環境のなかで、色々な事件が起こっていることも私達は視野に入れざるを得ませんから、ここで手放しでは喜べないという、この保育者の気持ちが分かります。しかし、それにも関わらず、そういう気持ちを抑えて、今は大喜びしているNちゃんに共感していこうという保育者の気持ち。いま保育に関わっている人達というのは、こういうふうに気持ちを動かしながら子どもを保育しているのです。

私は保育の世界の色々なエピソードを紹介するなかで、世間に保育の営みというものをもっと知ってほしいと思っています。世間の人達は保育というものを簡単なことだと思っています。「子どもを公園に連れて行って遊具で遊ばせて、昼が来れば連れて帰ってご飯を食べさせて午睡させて、午睡から起きればおやつ食べさせて、少し遊んでからお父さんやお母さんが迎えに来る。そんなの誰でもできるじゃないか」というような、非常に浅はかな保育観が蔓延しています。国の保育行政を動かしている政治家ほど、そういうナンセンスな保育観しか持っていない場合が多いのです。

でも本当に保育の営みを間近で見ていると、大事なものは「あれをした、これをした」とか、「こういうことをさせて、こういう力をつけた」という目に見えることではなくて、こんなふうに一人一人の気持ちに寄り添って、その子の思いを受け止めて、心が前を向くようにもっていく。これが保育で一番大事なところなのですね。

しかし、その保育で一番大事なところ、つまり「育てる」という営みの一番大事なところは、目に見えないわけです。Nちゃんが、こんなふうに喜んでいて。それを色々複雑な思いに駆られながら、今はとにかく受け止めよう、そう思って関わる。これは、非常にしんどいことです。でも、そのことによって子どもが元気を取り戻したり、前を向いたりということが起こってくる。

例えばエピソード1の、弟が生まれたNちゃんの場合でも、この保育士さんがはっと気が付いて、そしてNちゃんの寂しい気持ちを受け止める。これが保育なのですね。目に見えない心の動きをキャッチする。このキャッチするところを、一般向けの言葉ではないのですが、私は「間主観的に分かる」という言葉でとらえています。そこが実は一番大事なところで、それによって子ども達の心が育っていくのです。

なぜ私が保育の世界で頑張っているのかといいますと、今多くの保育園・保育所あるいは幼稚園で、「たくさんさせて、たくさん力をつければその先にその子には幸せが待っている」というような暗黙の考えを大人の多くがもっていることに疑問を感じるからです。こうした考え方を一番強く持っているのは保護者で、次に持っているのが保育者です。しかし、これでは子どもが幸せになれないということを、早く保護者も保育者も気がつかなくちゃいけない。そこ

でまず保育から変えていかなければと思っているわけです。

ですから、今日私は「育てられる者から育てる者へ」、「看取る者から看取られる者へ」という図式を描きましたが、それによってまず打ち壊したかったのは、従来の「できること」が階段状に増えていって、二十歳ぐらいに完成するという従来の発達のモデルです。

今日ここにお集まりの皆さん達の頭の中にも、おそらくすっかり入り込んでしまっているであろう「発達」という考え方が、本当に子どもの幸せのためになるのか、発達を急がせる、力をつけるということが本当に子どもを幸せにしたのかということ、皆さんにも考えていただきたいのです。

そういうふうに「できること」がどんどん増えていくことが発達だという枠組みのなかでは、子どもの心の問題が見失われています。目に見える「できる、できない」に目が向かったために、いま子どもがどんな気持ちでいるかというところに親の気持ちが向かなくなりました。保育者もそうです。ですから、この流れを何とか変えていきたい。目に見えない心を育てることが、その子の将来にとって一番役に立つ一番大事なところなのです。そこが育っていないから「小1プロブレム」が起こるのだという話に繋がってゆきます。

私のモデルに戻れば、「同一化」の話をしたあたりをもうちょっと詳しくしておくべきでした。つまり、子どもの幸せは、周りにいる大人達がその子のことを「かわいい、大事だ」と思うかどうかのカギとなるわけです。

何ができて何ができないかではなく、「かわいい」と思われれば、子どもは必ず自分に自信を持てます。そして、かわいいと思ってくれる人を信頼します。親をまず信頼し、それによって自分に自信を持ち、自分を肯定できれば子どもは持っている力を必ず出せる。つまり、早くから色々なことさせて力を引き出そうとしなくても、気持ちが前向きになれば持っている力は出てくる。そう考えていくのが本来の子育てというものだったのに、なぜか「発達」という考え方に惑わされて、いろいろと仕掛けていけば子どもに力がついて、その先には幸せが待っているという、ある種の錯覚に多くの日本人が捉えられてしまった。

その結果、今どんどん早期教育を目指して、色々なことをさせて、英語も早くから教えて、というような枠組みが動き始めています。けれども、それが子どもの幸せに繋がるとはとても思えません。その証拠に、今学力低下で大騒ぎしています。学力などほとんど心配しなくてもよいはずのことで、学力以上に心配しなければならないのは、日本の子どもの学習意欲が世界で最低であるという現実です。この責任は親と保育者と教師にあります。

つまり、子どもがやりたいと思ってやることを応援して力がついていくのは大いに結構ですけれども、小さい時からやりたくないことを強引にさせて力をつけるという枠のなかで、子ども達はどんどんやる気を無くしている。つまり意欲が薄らいでいる。ですから学習意欲が世界最低というのはある意味で当然です。これだけ「させられてさせられて」の保育や家庭での養育であれば、当

然学習意欲は湧かないでしょう。

私は大学生を教えていて、そこが大変に辛いのです。勉強したいと思っている学生が全然いないわけですから。この間の新聞の調査によると、いま日本の中学生の6割が「自分に自信がない」ということで、これは世界でも断トツで1位なのです。他の国では10%を切っているのに、日本は60%です。そういう自信のなさはどこからくるかという、やはり心の育ちが十分でないということからくると思っています。

ちょうど時間がまいりました。今日はこの「育てられる者から育てる者へ」というたった一枚の概念図を説明しただけなのですがすけれども、ここから色々なことが考えられると思います。ここからはみなさんが、このテーマに関わってどんなことを考えられたか、ご質問なり、ご感想なりをいただけたらうれしいなと思っています。

ひとまず私の話はここで区切りにしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】 鯨岡先生、どうもありがとうございました。皆様の方からご意見あるいはコメント、質問などございましたら受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか。

【質問者1】 先生ありがとうございました。この4月から保育園で、ちょっとパートで働かせていただいています。ちょうどいま3歳のちょっと賢い子が、「先生が悲しむようなことを言ってあげようか」と言うのです。ちょうどお昼寝の時間だったので忙しい振りをして無視をして、その悲しい話はまだ聞いていないんですけど、そういう子には何て声を掛けてあげたらいいんでしょうか。

【鯨岡】 なかなか難しいですね。3歳の頃というのは、イメージが膨らむ年齢ですよ。ちょっと聞きかじったことや絵本のなかにあったことも含め、大人達の言っていることを耳に挟んで、どんどん自分でイメージ膨らましていくことのできる年齢ですね。そのときに子ども達は自分で思いついたことを人に聞いてほしいので、たぶん先生にそういうことを言ったんじゃないかなと思います。

そうしたときに、話を聞いた側が、何かおどろおどろした話だから、急に心配になってしまって、何かその子のなかにすごいマイナスのものがあるんじゃないかと思ってしまうことが意外に多いのですが、まず、その子がどういう家庭生活を営んでいるかというのを少し見て、そうひどく心配な出来事がないようであれば、これは子どもの想像力が豊かになってきたときに、先生の気持ちを惹こうとして言っていることだな、というぐらいに受け止めて大丈夫だと思います。

でも、やっぱり本当に家庭生活が乱れていて、現実の生活のなかで怖いことがしょっちゅう起こっていて、しかも、それが冗談半分じゃなくて、かなり生真面目な形で先生に訴えられてくるというようなときには、やっぱりその子の内面を考えてみなければなりません。

ですから、具体的なケースに即してでないとちゃんとした答えができませんけれど、一般的に言えば、たぶん3歳の子どものイメージが膨らんできて、先生に注目してほしいと言っていると受け止めていいと思います。そういうときに、やはり午睡のときで手が離せなくても「あとで必ず聞いてあげるからね」とか、「いま先生は忙しいけれども、あとでちゃんと聞いてあげるからね」というふうに誤魔化さないで、ちゃんと受け止めてあげるよという姿勢は示してほしいですね。よろしいでしょうか。

【質問者1】 はい、ありがとうございます。さっき、ちょっと出てきたエピソード勉強会というのが、もし名古屋で参加できたらいいなと思うのですけど。

【鯨岡】 名古屋でも去年まで民間の保育園の人達と、何回かエピソード記述の勉強会を持っていたのですが、いまちょっと頓挫しています。全国各地でやっていますが、そこにわざわざ来てもらうわけにもいかないので、名古屋であったときにご一緒できるといいですね。またホームページなどで探ってみてください。何かあれば、ご参加ください。

【質問者1】 ありがとうございます。

【質問者2】 鯨岡先生、今日は本当にありがとうございました。最後の辺りで「発達」という考え方が、子どもを幸せにしたのかということをお話されましたが、目に見えない心の育ち、寄り添いを、「心の発達」というのではなく、あえて発達という枠組みから外してお話しされたのですが、わざと別枠で、そういうふうに述べられた意図っていうのは何かあるのでしょうか。

【鯨岡】 これまで発達心理学を組み立ててきた発達検査とか知能検査の中身というのは、みんな「できる—できない」で構成されていて、能力面をテストするものなんですね。

それに対して信頼感とか安心感とか、自分への自信とか自己肯定感とか、そういう心の面というのは右肩上がりに発達していくものではないんですね。それは、どういうふうに色々な経験を溜め込んで心を動かしていくかということなのですけれども、たぶんそれは従来のテストのようなもので計れるものではないですね。

周りで保育をしている人や、あるいは親の立場の大人が傍らに行けば、その

子の自己肯定感とか信頼感というのは、肌を通して体で感じることができますが、外から眺めていたのでは分からないですよ。

従来の「発達」というのは外から見ていても分かるような、測定できる変化でもって構成されていたんですね。私が考える心の育ちというのは、傍らにいて、その関わっている人が体を通してしか感じられないので、なかなかそれを誰が見てもそうだろうという形では提示できない。ですから、どうしても別枠で考えざるを得ないと思って、それでちょっと別な説明の仕方をしているわけです。

【質問者2】 ありがとうございます。

【質問者3】 ありがとうございます。「ことばの教室」を担当している教員です。鯨岡先生のお話のなかで、ひと回り外側の楕円に含まれるようになって大変うれしく思っております。

今日の先生のお話のなかで、おじいちゃんの問題、それからきょうだいのところも複雑に絡んでくるのだということを伺いました。

いまの「ことばの教室」ですと、これまでは、例えば発音をどう直していくかとか、難聴さんの場合ですとその言葉をどういうふうに増やしていくかとか、吃音のお子さんですとどう流暢性を獲得していくのか、というところに目を奪われていたわけですが、最近は子どもたちのグループ活動等を大切にしようということで、実践をしてみると、確かになかなかよく回っているなど考えられるようになってきました。

そのなかで、子どもたちの動きを見てみると、概念図の「子ども・親・親の親」ではないのですが、例えば中学生段階だと「先輩・後輩」、小学校段階ですと「上級生・下級生」のような関係性のなかでも、中学生が小学生の子どもに語る時には、やっぱり同一化があるように思います。「こういうふうにしたほうがいいんだよ」と言っているのは、実は今話しているその子がそういうことを考えているんだな、ということがあって、この関係発達の概念図で少しきょうだいの話があったんですが、そのような形で子どもの「世代間」と言うところと違うんですけど、ちょっとした年齢の違いが、やっぱりそういうものを含んでいるんじゃないかなと思いました。

そうやって見ていくと、とても子ども達の成長の説明がついて、ちょっといただいちゃおうかと考えています。そういう見方はできますでしょうか。

【鯨岡】 できます。今日はお話しできませんでしたが、保育の世界に入って、いろいろ見聞きするなかで、そういう経験を私もするわけですね。

特に異年齢保育をしている所から教えられることはたくさんありまして、どうしても我が国では年齢ごとに区切ったクラス編成というのが、小学校まで

ずっと持ち越されていくわけですが、子ども同士が異年齢で付き合うということは、とても大事なことです。昔の学校や、保育園がない時代をさかのぼって考えれば、子ども達が育てられて育っていくなかで、育てる者は実は親や大人ばかりではなくて、上の年齢の子ども達が色々との下の子どものお世話をしたり、その下の子どものモデルになったりという形で育ちあっているわけです。

ですから本当は、その異年齢の経験が子どもの成長にとっては大事なのです。昔はたくさんの子どもが地域で群れていて、それが異年齢の交流を可能にしていたのですが、今はそれがほとんどできない。それを可能にするのは保育の場だと思っています。それで、年齢割のクラス編成をしているところでも、色々な機会を見て異年齢で交わるチャンスというのは必要だということを保育の世界では言っているわけです。

学校でも同じことが言えて、学校では本当に年齢の輪切りが強いんですけど、過疎地などに行きますと、異年齢混合の学級がある。そういうのを見ると、先ほどお話しされたような、年齢の違う子ども同士の間での育ちあいというのは確かにあるのです。

確かに、効率よくカリキュラムを伝えていくという枠のなかでは、能力的に平均化された、年齢ごとの輪切りというのは非常に効率がいいのかもしれませんが、やはり、そういう異年齢間での育ちあいというところに、もうちょっと目を向けなければ、と思います。子ども達が能力面だけじゃなくて人として生きていく力、つまり人間関係の持ち方を身につけていくためには、そういう異年齢のなかでの経験というのがとても大事だと思うのです。ですから、私の概念図の外側の楕円のなかに、先生の言われたような異年齢の子ども同士のつき合いというのを入れることは、十分可能だと思いますね。

【質問者4】 大学院で心理学を学んでいる者です。先生のお話の最後の方で、新しいことができる、できないばかりに目が向いて、英才教育に走るというお話がありました。私の甥と姪がいま3歳で、1歳半ぐらいからずっと英語を勉強しているのを見て、これは子ども達にとって果たして幸せなことなのかとすごく疑問をいただいています。公園に行っても遊ばないでベンチに座っているだけだったり、この先どうなっていくのかという心配も多少あります。

本屋に行くと「子どもに何を学ばせたらいいか」という雑誌がとても多くて、親世代というのは、どうしてそういうふうに通学を第一に持ってくるのか、ということをしごく考えるのですけれども。何かヒントになるような先生のご意見があれば、お伺いしたいと思います。

【鯨岡】 確かに、それは大変深刻な問題で、私も何とかしたいなと思いつつ、今の保護者の「力をつければ、その子が幸せになる」という価値観を揺るがす

というのは難儀だと思っています。ある意味「子どものため」と言いながら、親が抱えている不安感みたいなものを鎮めたいというのが本音ですよ。つまり、子どものためだと称しているけれども、言ってみれば保険を掛けたいわけです。これだけのことをやって、これだけの力をつけたら、そのあとは子ども達でやっていけるんじゃないかというような。しかも今の若いお母さん達は目先のことしか見えないわけです。

私などはどうしても、その子が20年後どういう人間になっているか、こういうふう「力をつけた」と称する子ども達が大学に入ってからどうなるのか、大学人としてすごく思うわけです。もう目一杯追い立てられて、ゴムが伸びきった状態で何とか大学に入ってきた子ども達は、いわば伸びしろがないと言いますか、ほとんど勉強する意欲がないのです。それは本当にかわいそうです。全部親がレール敷いてくれて、レールの上を走っていれば親は機嫌がいい。そのうちに走ることにしか快感を覚えなくなってくる。

今高校生たち聞いてみると、偏差値が上がるのが快感だと言うわけです。本当は他に楽しいことがあるはずなのに、それに目が向かない。レールの上を早く走ることが快感になることが、かえって将来大人になってから自分らしく生きられないということに繋がってしまうのだということに、どうすれば早く親御さんたちに気づいてもらえるのか、と思います。

今の若い親御さんたちは、自分達が小さいときから「頑張り」と言われて色々させられて大人になってきた世代ですから、自分達も子どもにそうしてやらなければいけないという、負の世代間循環が巡っている可能性があるのです。それをどこかで阻止して、もう一度ごく普通の世代間循環に戻すためにはどうしたらいいでしょうか。私はそのために一番有効なのは、この「発達」という考えが果たした功罪、いい面もあったと思いますけども、罪な面もたくさんあったと思うので、それをはっきりさせて、そんなに小さいときから力をつけても本当にその子の幸せを保障するものではないということを、しっかり伝えていかなければならないと思っています。ただし、この「発達」という考え方はいつの間にか染み込んだわけですから、それを脱色するためには、大変な時間がかかると思っています。しかし、それをやっていかなくちゃいけないと思います。それで話の最後のところで、「発達」という考え方に対して、ちょっと批判的なことを言ったわけです。

具体的には、なかなかアイデアが湧きませんが、まずは事あるごとにお母さん達の持っている幻想みたいなものをどこかで壊していかなくちゃいけないのかなというふうに思っています。

【質問者4】 ありがとうございます。

【質問者5】 今日は、ありがとうございます。保健センターで心理士として

育児相談や発達相談をしております。今日のお話のなかで、今のお母さんたちというのは自己実現を求めて生きてきているので、「育てる者」への転回のところで「親になる」というのがなかなか難しい、というお話を伺いました。

今地域の行政の計らいで、お母さんが育休や産休を取りやすくなったという一方で、保育園という場が充実してきたことによって、そこに任せてしまえば自分は仕事で働けばいいということが起きているのかなあと思っています。

1歳半検診とか3歳児検診のあとの親子教室で相談をしたりする中で、「もう少しお母さんにお子さんに関わってもらいたいな」とか、「できる・できないの前に、この子の気持ちを確認する」とか、「もう少し分かってあげることができないかな」とか、という話をするのですけれども、やはり難しそうだと保健師さんが判断すると、「ではこの子を早く保育園に入れるようにして、保育士さんの方からこの子の心の育ちというのをやってもらおう」という話になったりするのです。

カウンセリングの場面ですと、すごく長い時間を掛けてお母さんに気づいてもらうというプロセスがあると思うのですけれども、なにぶん現場ではそういう時間がないので「こういうことはどうかな、ああかな」と一緒に考えながらはやるのですけれども、やっぱり限界がある。

確かに、私達も子育て支援の一つとして、お母さんにこういう関わり方がありますよ、と気づいてもらったり、一緒に考えたりということをしてますが、それを3歳までにできなかったなら、後は保育園や先生から色々教えてもらったり気づいてもらったりという作業をしてもらえるといいのかな、とも思うのですけれども、どこまで保育や学校の教育がするのか、どこまで手を出すのかというところが難しいなと思っています。

子どもを育てるというだけでなく、親に色々なことに気づいてもらったりするということに対して、先生がどのようなお考えをお持ちなのかをお聞かせください。

【鯨岡】 今回の保育所保育指針の改定なかで大きな変更点の一つが、「保護者支援」というところですね。それは就園している子どもの保護者の支援だけじゃなくて、地域で子育てしている親御さんの支援も保育士さんたちのこれからの仕事ですよ、というのがこの指針に盛り込まれていて、それは保育の仕事をしている人たちにとってかなり大きな変更点になったと思います。

私は本当にそれが必要だと思っています。私自身、そういうふうには指針を変えることを提言した一人でした。というのも、やはり子どもを保育するだけでは十分じゃないと思うからです。いかに保育園で一生懸命子どもを育てても、帰る家がひっくり返っていて、親が子どもを育てる構えを持っていなければ当然子どもはいい具合に育たないわけです。そうした保護者達がどうすれば子どもを育てる気持ちになっていくか、それをサポートするのも保育士さんたちの

仕事ですよ。そのためには国が保育にもっとお金を投入して、それで保育の人達がちゃんと仕事をできるような体制を組む必要があります。指針でそういうことを謳ったということは、保育の人達は親育ての側もやっていってくださいということですから、そうならなくちゃいけない。

本当に今保護者が親として育てていくのが難しいというのは、お話の通りで、本当は中学・高校というような学校教育のなかで、今のように単に教科を教えているだけでは駄目なのですよ。一人の人間を育てるという観点で、今の学校教育を全部見直さなければいけない。

教科は教えているかもしれないけれども、一人の人間を育てるという形で先生方も動けないでいる。そういうふうには教育できなくなってしまっています。子ども達がどういう人間に育っていけばいいのかというと、本来は、次の世代を育てられるような人に育っていかなければいけないわけです。

確かに子どもたちに力をつけさせて、いい大学には行けるようにしたかもしれないけれども、そういう人たちが、人を育てる考え方もその知恵も何も持たないまま、大人になって子どもを育てる側に回ったら、全く何も分からないという状態。彼らの親の世代も分からないし、もう専門家にお任せしますという構図になってしまうわけです。

そうならないためには、まずは教育のシステムを変えていかななくては行かないだろうし、手近なところでは保育の立場の人達が、色々なチャンスを捉えて、親を育てていくと言いますか、親に色々なことに気がついてもらうための働き掛けをいろいろこれから工夫していかななくてはなりません。

今保育園・保育所がやっている子育て支援は、園を解放して、そこに地域の親御さんたちが来て、そこに保育の人も入るということをやっています。それが親育てについての、一番手近で有効な方法かなと思います。確かに集まってきたときは、子ども達を保育士さんに見てもらって、お母さん同士がお喋りをしているのですが、そのうちに段々と子どもに目が向かっていくのです。そして子どもがかわいいということがだんだん分かってきますと、お母さん方はやっぱり自分達で色々なことを工夫していくようになりますね。

ですから、今の子育て支援の枠で動き始めているものを活用し、また保育士さんたちがチャンスを掴んで、保護者を育てるための何か動きをしていく。そして学校教育についても、あいにく中教審答申はそういう方向を向いていっていますが、教育が次の世代の人間を育てるのだというのは、本来教育の目標でなくてはいけないはずなので、そういうところが変わってくると、いまの若い保護者達の考えも少しずつ変わっていくのかなと思います。

かなり息の長い話で、明日、明後日すぐ変わるというわけにはいきませんが、それぐらいの展望で動いていく話かなというふうに思っています。

【質問者5】 ありがとうございます。

【質問者6】 一般市民です。やがて親の親になりそうな年齢でございますが、その親の親になるということが非常に怖いことで、できれば親の親になりたくないなと思っております。仮に親の親になったとしたら、今日ご説明いただいた概念図のなかの、広義に育てる側になりたいと思うのです。

私どもの近くで見ていると、「親」と「親の親」の間の葛藤、それは物理的に離婚などによってやむを得ず、親の親が親になっているという場合もありますが、実は親自体が親の親に対して「俺らは働いているんだから、親の親が面倒見るべきじゃないか」と言っているような感じで、また親の親のほうは、親が子どもをみることができないから直接親になっているというような感じがするわけです。そういうふうにと考えると、もう怖くて、怖くて、とても親の親になどなりたくないなと。

それから先ほど先生がおっしゃったように、子どもに教育をしたいというのが、やや日本的な世襲制度、すなわち子ども達が満足に成長してくれれば、私が年を取ったときに面倒を見てくれるだろうというような、欲心があるのではないかなと。

私は、3ヶ月児のBCGの集団検診で、そこについてきた子どものお守りをするボランティアをやっておりますが、何か非常に冷たい親子関係とか、反対に盲目的な親子関係とか色々な関係があるような気がするわけです。そのなかで感じたことを、先ほどの感想として申し上げただけなので、先生からお応えを頂戴しようと思っておりますけれども、何か非常に嫌な世代に入っちゃったなという感じがしております。どうも、ありがとうございました。

【鯨岡】 そうですね。確かに親子関係のなかには難しいものがたくさんあって、幸せになるのも楽じゃないなというのはよく分かります。それは「育てる一育てられる」という関係のなかで、どうやって子どもの世代とよい関係を毎日苦労しながら作り上げてきたかという歴史が、やはりものを言うんだなと思います。そこでよい関係を作れなかった場合は、どうしても世代間循環がうまく巡っていかない。

ですから、今このときを、お互いに自己実現を目指して張り合えば、どこかで親子の関係というのは軋んでしまいますよね。でも、長い目で見て親子の関係、子どもが社会に出ればそれで終わりじゃなくて、子どもが社会に出たあとも実は孫を育てるという形で色々親子の関係は続いていく。そういうことを見据えて、必ず葛藤はあるんだけれども、やはり親子の関係をできるだけよいものにしていこうという気持ちをお互いに持ちながら、「育てる一育てられる」という関係が営まれていかなければいけないのだということ、今のお話を聞きながら思った次第です。

【司会者】 鯨岡先生どうもありがとうございました。皆様、ご静聴ありがとうございました。

ございました。今日の講演でお聞きいただいたように、鯨岡先生はモデルを作られてもそれで一安心ということではなく、ご自身の個人的な経験も振り返られながら、研鑽を積み重ねておられます。違和感を覚えられたところに目をつぶらず、そこを何とか現実在即したものにしていこうというところに、非常に深い感銘を受けながらお話を拝聴しておりました。

先生どうもありがとうございました。皆様どうもありがとうございました。

参考文献

- 鯨岡峻 (2002) <育てられる者>から<育てる者>へ NHKブックス
- 鯨岡峻 (2006) ひとがひとをわかるということ―間主観性と相互主体性 ミネルヴァ書房
- 鯨岡峻 (2008) 子どもは育てられて育つ 「教育と医学」8月号、9月号 慶応大学出版会
- 鯨岡峻 (2009) エピソード記述で保育を描く ミネルヴァ書房